私にとって言語文化教育とは何か

他者の個の文化と擦り合わせながら，自分の個の文化を作り上げていく能力を育成する

理論研究「言語文化教育研究」から

林 逸菁

はじめに

私は今まで日本語教育について深く考えてこなかった。ただ，日本語教育を考えたことがなくても，何年も日本語学習者として経験してきた経歴に基づき，日本語教育が実践される日本語教室へのイメージが自分の中に何らかの形が描かれている。しかし，「日本事情－言語文化」（以下 NJB とする）を履修したことで，今まで描かれてきた私の日本語教室観は引っくり返された。NJB の教室にいる私は魔法にかけられたように普段受身でいる自分がその教室に入ると能動的になる。それ以来 NJB で覚えた自分の再生の感覚がずっと私の体に染み込んでいるが，その感覚の源がどこから来たのかを追究しなかった。というより追究する勇気はなかった。なぜかというと，日本語教育も考えたことがない，日本語教授歴もない私には私なりの言語文化教育観なんてないだろうというコンプレックスを持っていたため，私の再生を与えてくれた教室に取り組まれている言語文化教育の理念を究明することを断念した。そのときの私は知識の有無で教育観を語れるかを判断したが，その後言語文化教育の実践を履修したことを通して，言語文化教育の理念は知識，経験がなくても語れるものであり，それが誰の中にもあるが，具体的な形で彫りだされているかどうかだけだと考えるようになった。そこで，自分の中にある目に見えない言語文化教育観を描き出すために，今回言語文化教育理論（以下 GBK とする）を履修することにした。つまり，この授業を履修した目的は言語文化教育の知識を求めてきたわけではなく，学習者として支援者として履修した言語文化教育の授業の経験に基づいて自分の中で蓄積してきた言語文化教育観を再確認するためでもあり，自分のことばで自分の教育観を語る試みでもある。

本レポートは，この三ヶ月の GBK での講義・議論，BBS 上の議論を経て，今までの経験によって蓄積されてきた言語文化教育観はどのように変わっていったかを

記述したものである。そして，最後に自分の考えの変容を振り返った上で，現在の私の言語文化教育観を明示する。

1. 最初の私の言語文化教育観

まず，言語文化教育研究が始まった当初考えた言語文化教育をここに示しておきたい。その時点で考えた言語文化教育と三ヶ月たった今考えている言語文化教育とはどのような変化があったのかを見分けるためである。

> 私はかつて文化を国の産物であると捉えていた。そして，言語にはその国の文化の色が入っている。すると，その国の文化を理解するためにその国の言語を身につけなければならない。つまり，言語の学習は国の文化を理解するためにあると思った。しかし，GBK に基づいて設計された授業，NJB を受けたことで，私の文化と言語への捉え方は引っ繰り返された。その教室で 5 年間日本留学生活の中で私は初めて自分のことばで語ることを実感した。その自分のことばとは台湾の文化に基づいたものでもなく，完璧に中国語から日本語に訳したものでもなく，それは私しか語れないことばであって，私の中にある文化に基づいて発したことばである。この発見から，私は文化というものは国に附属するものではなく，一人一人の人間に内在しているものだということを新たに認識した。NJB の教室で，私は自分のことばを通して私の文化を語りながら，クラスメンバーのそれぞれのことばに耳を傾け，彼らの個の文化に触れることができた。それで，私がこれまでに持っていた，日本人・日本文化を知るために日本語を学ぶという学習目標が崩れて，自分と他人の個の文化が交錯したときに分かり合えた喜びを味わうために日本語を学んでいるのだと思うようになった。
>
> では，なぜ言語と文化を統合しなければならないのか。私の考えでは言語はただ個々の文化に触れる手段だけでなく，個の文化を作り上げるにも不可欠な存在である。人は考えていることを言葉で表現し，それを他人に伝えたら，他人の思考による表現が返ってくる。そうすると，人はその表現された言葉をキャッチして，それをどのように処理するかとまた考え始める。このような思考と表現が往還するプロセスは言語無しでは行われないと思う。つまり，言語を媒介して思考と表現の往還で個の文化を確立していくのである。また，私の考えている個の文化は，他人の文化に触れる際に随時に変化するものでもある。

言語文化教育の教室では，「オリジナリティーのあるものを書く」，「自分しか書けないものを書く」という言葉をよく耳にしていた。オリジナリティーとは何かを考えるのにずっと頭を抱えて悩んでいた覚えがある。今はそのオリジナリティーとは個の文化を指しているのではないかと思っている。オリジナリティーを出すために，私は一人で考え込み，書き込んだ作業に励んだが，そのただの考えの原石を，オリジナリティーの宝石に磨かせてくれたのは，クラスメートのそれぞれの文化とぶつかったからである。そこで，オリジナリティーなり，個の文化なり，それを一人での完結作業で形成されるものではなく，他者の文化に触れながら，永遠に変容していくものだと捉えている。

従って，私にとって言語文化教育とは人間に言語と文化を国の範疇から捉える形式から解放させて，自分の操る言語に自分の魂を注ぎ，様々な人々に出会う際にちゃんとその人の中に内在している文化を直視し，それに触れながら自分なりの文化を作り上げていく能力を育成する教育だと思う。(2004 年 10 月 21 日レポートより)

以上のように，当初私が考えた言語文化教育は思考と表現の往還を通して自分の魂が注がれたことばで，他者と関わりながら，自分の中に内在している文化，すなわち個の文化を確立していく力を育てる教育だった。この時点では言語文化教育について私はただ個の文化を確立することだと漠然考えていた。しかし，三ヶ月の GBK と BBS 上の議論を通して，私にそれについてより深く考えるきっかけを与えてくれたため，自分の言語文化教育観をさらに掘り下げることができた。次に私の言語文化教育観とかかわる「思考・表現する実感」，「個の文化」，「個の文化の形成」という順に述べていく。

2. GBK および BBS 上の議論にめぐって

2-1. 思考・表現する実感

GBK 授業の始めに書いた言語文化教育観では「NJB の教室で 5 年間日本留学生活の中で私は初めて自分のことばで語ることを実感した。」と書いているが，おそらく，そのときの私はちゃんと自分の思考と表現を繰り返してことばを発したため，自分のことばで語ることを実感しただろう。しかし，この文章を書いた当初，なぜ自分のことばで語ることを実感したのかは考えようもしなかった。それを考えるようになったのは GBK の授業以外，も一つの議論の場である BBS 上の議論に触発さ

れたのである。それが学習者の思考に働きかけることが可能かという議論であったが，次にその議論にめぐって様々な意見を示す。

「第一言語でも思考できない，表現できないといった学習者の場合，一体どうなるのでしょうか？」（N さん），「第一言語で，「思考ができない学習者」と，「思考をしてこなかった，あるいは，そのことに慣れていない学習者」とは区別しなければならないと思います。」（S さん），「人間は生得的に「考えることができる」と信じたいです。」（K さん），「「あの学習者は母語でも読解力がないから，もう日本語でも無理なんだろうね」という会話は日本語教師の間ではよく交わされていると思います。」（E さん）。

以上の意見から思考・表現できない学習者がいると考えている人もいることがわかるだろう。これらの意見を読んだとき，私は最初驚いて，そして，次のような書き込みをした。

私は誰でも思考・表現できると思っています（特殊な病気じゃなければ）。自分が思考・表現できないと思い込んでいる人は，ただ思考・表現を拒否している，それかまだ自分ができると気づいていないと思います。これは，第一言語でも同様に起きていると思います。私の場合は後者にあたりました。自分が思考・表現できると気づかせられたのは，科目等履修生のときに，細川先生の総合（NJB）の授業をとったからです。学習者の思考力・表現力の養成を日本語教師が全部カバーすることについては，私も不可能だと思います。ただ，学習に思考・表現するきっかけを作ったり，学習者が自分の思考・表現を通して味わった喜び・満足を体験させる機会を作ることができるのではないかと思います。

ここでは思考・表現できない学習者がいるという考え方を持つ人を批判するつまりではないが，実際にそのように考えている人が多いのではないかと言いたいのである。私は人間は誰でも思考・表現できることは当然だと思うので，そうではない意見を聞いたとき非常に驚いたわけである。しかし，この衝撃は私になぜ人間が誰でも思考・表現できるという考えを持っているのかを考えるきっかけを与えてくれた。よく考えてみたら，私は最初からそのような考えを持っていたのではなく，NJB の体験を通して私はいつのまにか自分があまり思考・表現できない人間だという考え方を捨て，自分が思考・表現しているのだという実感をつかめるようになっ

ただろう。そして，その実感から人間は誰でも思考・表現できるという考えに自然に生まれてきたのではないかと思う。

このように，人は自分も他者も思考・表現することに対して看過しやすいのではないかと思う。つまり，コミュニケーションにおいて自分が思考・表現していることを自覚していない，自分が思考・表現できないという思い込みを抱く，また，他者に対して思考・表現できないだろうというラベルを貼るということである。ここは私が一番問題にしたいところである。上述の書き込みで「(教師は) 学習者が自分の思考・表現を通して味わった喜び・満足を体験させる機会を作ることができる」と書いているが，今考えてみれば，その喜び・満足は学習者に自分の思考・表現する力が持っていることを自覚させることができる。つまり，私が考えている言語文化教育の教室では学習者は自分が思考・表現できること，そして，思考・表現していることを実感する気持ちを育てることは非常に大事だと思う。一方，そのような気持ちが育むように働きかける教師は人間の思考・表現を看過することで学習者の自分が思考・表現できないという思い込みがさらに強まることがないように心がける必要があるだろう。

このように，BBS 上の議論のきっかけでなぜ自分のことばで語ることを実感したのかを考えることによって，根本的に人間は思考・表現ができることを認知することが大事であることを認識し，そして，学習者に自分が思考・表現することを実感・意識し，自分の思考・表現の中から得られる喜び，満足といった気持ちを味わわせたいと考えるようになった。自分の思考・表現を確実に感じる喜び・満足を味わえば，思考と表現を往還させる意欲が生まれるのではないかと考えているためである。

2-2. 個の文化

最初の感想により，自分のことばとは自分の中にある文化に基づいて発したことばだとしている。言い換えれば，ことばは個の文化の産物ともいえる。ここでは個の文化について私の考えを述べていきたい。

始めて受けた総合の授業で課された私のレポートのお終わりに次のような文章が書かれている。「個の文化クラスのメンバーのそれぞれの持っている考え方，価値観は一つの文化として考えてもいいのではないか。」この文章から，総合の授業を通して個の文化という概念は初めて私の中に生えてきたことがわかるが，しっかりと個の文化を把握しているわけではない。そして，GBK 授業のはじめに書いた文章では，「私はかつて文化を国の産物であると捉えていた。(中略) しかし，NJB を受けたことで，(中略) 私は文化というものは国に附属するものではなく，一人一人

の人間に内在しているものだということを新たに認識した。」と書いている。このときの私は，明白に文化を個人の総体を表すもの，個の文化として捉えている。しかし，個の文化の中身とは何かについてまだ自分の中でもやもやしている。最初は人の考え方，価値観は個の文化だと考えたが，価値観だけではなんだか物足りなく，個の文化を総括できない気がした。しかし，BBS の議論で W さんの個の文化について定義することばを読んで，私も個の文化への定義に決着をつけることができた。

● W さんの「個の文化」の定義

「個の文化」…実は一人一人個性があるんだ，ということなんですよね。「文化」に引きずられて，何か高尚なもののように見えてしまいますが，「60 億の文法」も同様で，見えない何か大きいものに包み込んで，その中にある真実を見ることをやめてしまうのではなく，「私の真実」対「あなたの真実」を向き合わせることで，新しい世界をみつける（ST からの脱却）ことになっていく。やはり「個の文化」は，すごく単純（いい意味です）なことではないか，という結論に達しました。GBK での「文化」とは，「一人一人の個人」ということなのではないでしょうか。「たくさんの特徴を持つ個人」が「文化」に当たるのではないか。

●私の最終的な「個の文化」の定義

「個の文化は人間一人一人の中身を指していると考えています。この中身は W さんが言っているたくさんの特徴の収束だと言ってもいいでしょうか。（中略）NJB（総合）でやっていることは日本社会で暮らすとのことをレポートの終わりに書きました。当時，私は個の文化は人の価値観だと思っていました。しかし，今は，価値観も人間の中身（個の文化）の一つの構成であり，趣味，特徴，性格などなどもりたくさんあります。そのような中身が形成させれてきたのは，我々が生きてきた，関わってきた様々な社会での積み重ねだと思います。（中略）このように考えたのは，先週細川先生がおっしゃった「我々が様々な社会を背負っている」のことばがあったからです。私は NJP のレポートでは，価値観は今までの人生で経験したことに基づくものだと書いていました。そして今考えてみたら，私の人生で経験してきたことは，私の今まで背負ってきた様々な社会との関わりだなあと思いました。」

私は個の文化を定義する際に，より深い意味で複雑できれいなことばで説明できたらいいなあとずっと悩んできた。しかし，W さんの「やはり個の文化はすごく単純なことだ」という意見を見てほっとした。そのことばを受けて私もいつのまにか文化ということばに引きずられて，それを説明することばの表現形式にこだわってしまったことに気づいた。今考えてみると，NJB が終ったあと，体に染み込んだ感覚で語ったことばは自分なりの個の文化の定義の基となっているのではないかと思う。今ここで語っている個の文化はただそれの繰り返しでもあると感じる。このように W さんのことばを受けて，私は素直に自分の単純の個の文化を主張することができた。

最終的な個の文化の定義では私は個の文化は人間一人一人の中身であって，価値観はただその中身を構成する一つであると述べている。このように考えられたのは W さんの「「たくさんの特徴を持つ個人」が「文化」に当たる」ということばからヒントを得たからである。また，W さんの書き込みで，「人の関心持つものはいろいろある。それを書き出したら，自分でも驚くくらい本当にたくさんある」と書いている。前述があったように私は個の文化の中身を探ろうとしていた。しかし，W さんのことばでその中身を全部見せることは不可能だということに気づいた。そして，私が考えていた価値観＝個の文化という認識が更新されて，個の文化＝価値観＋特徴＋個性＋●＋▲＋・・・と考えるようになった。

GBK 授業では社会について細川先生は「社会は枠である。その社会の枠組みは個人の外にある。」と説明した。そのことばを受けて私は枠ということばにとらわれ，社会を構造的なもの，大きい組織という固い印象を持っていた。社会を日本社会，男社会，女社会，若者社会といった国や性別，年齢などの大きい枠組みを持つ構造だと考えた。そして，社会の枠組みは個人の外にあることは，人間が大きい組織，枠である社会に属し，包含されており，人間の色がその枠の色に染められると解釈した。しかし，その後，細川先生はまた社会について「我々が様々な社会を背負っている。」と論じたことばで，私の前述した社会，また社会と人間との関係へのイメージを捉えなおした。

「我々が様々な社会を背負っている」について細川先生は人間が生きていく上にいろんな社会に関わっており，同時に複数の社会に参加しているからと説明している。私はそれを人間が生きている間に様々な場面に出会い，それぞれの場面で自分の役割を果たすことだと考えるため，社会を大きい組織だけのものから，私たち人間一人一人を取り巻く身の回りの一つ一つの環境・場面だと捉えなおしたのである。そして，社会と人間の関係について，様々な社会を背負っていることは人間が社会

その場面を選択することができ，自分が選択した社会で自分の役を演じ，自分の役割を果たしながら，自分の色をつけていくのである。すると，最初の人間は大きい組織の社会に附属され，自分の色が社会に染められていくという考えが覆されたわけである。この捉えなおしで私は個の文化と社会は非常に密接な関係であり，切り離して考えることができないことを認識させられた。

前述したように私は「価値観は今までの人生で経験したことに基づくものだと考えている。その今までの人生の経験を背負っている社会に言い換えれば，価値観の形成は生きているうちに関わってきた様々な社会で自己の色を仕上げる作業の積み重ねである。すると，価値観などによって構成される個の文化は，背負ってきた社会での自己形成の積み重ねの総体であるといえよう。以上述べてきたことによって，私は個の文化とは価値観をはじめ，性格，趣味などによって構成される人間の中身であり，それは人間の生きているうちに背負ってきた様々な社会との関わりの積み重ねともいえると定義つける。

2-3. 個の文化の形成

私の個の文化の形成をはっきりと描き出せたのは細川先生の講義で「人間はレッテルを貼ることを通して物事を認識しようとする」のことばがきっかけであった。私は今までレッテルを貼るのは集団文化を認識する際にだけ（日本人は働きすぎる）を行うことだと思っていた。そうじゃなくて，個人に対しても（ex 田中さんは親切だ）レッテル貼りの作業が行われながら，認識していくのだとわかった。このようなレッテル貼りの作業は個人の中で行われているので，レッテル貼りの作業を行った結果は個人しかわからないし，様々なレッテルを貼ることによって形成された認識・イメージは個人の中に内在しています。つまり個の文化はレッテルを貼ることによって形成されるのである。しかし，そのような認識が固定化してしまうことがしばしばある。この認識が固定化したことはステレオタイプと呼ばれている。私にとってのステレオタイプは悪のイメージだけであり，持っていけない禁物だと思った。しかし，GBK の講義で細川先生は「ステレオタイプはものではなく，状態である。ステレオタイプは思考停止の状態である」と話している。それを受けて，私はステレオタイプへの捉え方が変わり，次のような書き込みを書いた。

> ステレオタイプがよくない，持っていけないということではなく，持っているステレオタイプが化石化し，またはそのステレオタイプで人・事・物を集団類型化してしまうことは危険だと思います。ですから，皆さんが言ったように

ステレオタイプを更新しようとする意識，能力があるかどうかはすごく大事になってくるんです。

今まで私はステレオタイプをなくすことができないと思っているが，それを持っていけないという負担はずっと心にあった。以上の書き込みのようにステレオタイプを問題にしたのはそれが悪者か善き物かを批判するのではなく，それを更新する意識・能力を持つことが大事だということを主張するためである。私は人間がステレオタイプを持って生きていくのだと悟ったので，悪魔のステレオタイプに憑かれている緊張感から解放された。さて，「ステレオタイプは思考停止の状態」という指摘があるが，どうのようにすれば思考停止の状態に陥るのを防ぐだろうか。次の議論から思考を停止状態から運行する軌道に戻す可能性について述べる。

ある人が「思考」してその人なりの「価値観」が生まれ，そのたくさんの「価値観」がその人の「思想」を形作るという解釈を考えましたが，これでいいでしょうか？「思考」して「価値観」が生まれると思うのですが」（K さん）

価値観は，今まで生きてきた人生，経験してきたことなどなど，いろんな出来事が重なってきてから形成されたものだと思います。価値観の形成には，思考することは不可欠ですが，（中略）総合での価値観のぶつかりは思考を活性化するためなのではないかと考えています。他人の価値観を知ったら，相手の価値観を賛成するか，反対するか，自分の価値観の方を言い張るか，なぜ相手の価値観を受け入れるか，なぜ自分の価値観を守るか，といろいろ考え始めます。（中略）自分で「なぜ」を考えて（思考），相手に「なぜ」を説明（表現）する作業の中で，人と人の関係が結び付けていきます。そして，人と人の関係が築かれた中で，思考と表現の往還を繰り返すことによって，価値観を再構築していくと思います。ただ，これは一人の完結作業ではなく，他人の価値観とぶつかりながら，何かを取り入れたり，何かを削ったりするのです。

上記の議論は K さんの思考・思想・価値観に対する発言に触発されて，私が考えている価値観と価値観の形成について語ったものであるが，私は発言での価値観のぶつかりは思考を活性化すると書いているが，その価値観のぶつかりは思考停止を再運行させる鍵であると今は考えている。価値観は個の文化の一つの構成だと考えると，個の文化を再構築するのに思考と表現の往還は必要だが，この往還を絶えず循環させるために，他者と関わる中で他者の価値観とのぶつかりが大切で必要と

なると解釈できる。前節で述べたように個の文化は自分の関わる様々な社会の中で自己形成の積み重ねである。社会での自己形成は一人で黙々と作業するのではなく，他者との共同作業であったり，他者と交渉しながら作業を行ったりすることは多々あると考えられる。その際，自分と違う価値観を持つ他者とどのように関わっていくかということは大きい課題となってくるだろう。この課題をやり遂げる中で他者の価値観に触れることによって，自分の中にあった価値観や考えなどが強固になったり，崩れたりして変容することがある。その意味で個の文化の形成における他者との関わりは，自分に物事を見る新しい目を持たせる，自分の思考と表現の往還を活性化させる役割を持っているといえよう。

これまで個の文化の形成における他者の関わりの必要性を述べてきた。その中で述べた自己形成の積み重ねた個の文化の形成において社会で他者とどのように関わっていくかという大きい課題は合意形成なのではないかと思う。合意形成についてGBKの授業で個の文化を重視すれば，合意を形成すること自体が矛盾している，意味がないのではないかという指摘があったため，個の文化はなんだか個人主義のようなものだと扱われていることを感じた。個の文化を重視することは，自分の考え・文化だけを大事にすればいいということではなく，生きている間人と接しながら生きていくはずなので，その中で自分の認識のほか，他者を通して認識していくこともあると考えられる。また，個の文化の形成は個人の中でレッテルを貼りながら，認識・イメージを形成していくと言っても，皆それぞれ自分の好き勝手に認識・行動するのではなく，お互いにバランスがとれるように交渉しなければならないと思う。そのバランスをとった交渉とは，一人一人が勝手にばらばらに生きていくのではなく，様々の社会で様々な他者と，それぞれの社会で課されたある目標の達成に向かって，お互いに調整することである。そのバランスをとることは自己と他者，つまり人と人，個の文化と個の文化との合意形成だと思われる。

では，なぜ合意を形成するか。先ほど述べたように自己による認識が固定化してしまうことがしばしばある。つまり，ステレオタイプが化石化し，集団類型化の認識になってしまうこと。そのせいで時々偏見や誤解を招く。しかし，合意形成を通じて，そのような危険を防ぐことができると思う。合意形成は他者との価値観に触れることによって，自分の中に形成されているイメージ・認識を確認することができ，場合によって更新されることもある。ただし，合意形成は個の文化にあるイメージ・認識を常に更新しなければならないことはなく，相手に合わせて自分を変える必要もない。それより，常に自分の持っている認識・イメージを疑いつづけ，更新しようと思う意識を持つことは大事である。つまり，個の文化は流動的な

ものであることが望ましい。そして，自分の認識がステレオタイプになった，ある人，物事に対して自分の思考が停止したことに気づかせてくれるのは，他者との価値観のぶつかり，言い換えれば，他者の個の文化と擦り合わせることだと思う。

3. 現在の私にとっての言語文化教育

以上の論述から私の最初考えた「言語文化教育観」をもう一回見直したいと思う。

言語文化教育の教室では思考と表現の往還が大事だということはいつも耳にする。そして私もそれが当たり前のことだと思った。しかし，私はそれが自分にとってなぜ大事なのかという問いをかけたことがなかった。今回の BBS の書き込みを読み返すことによって，私は NJB を通して自分の思考・表現に対する考えの変容を振り返ることによって，私は学習者に自分が思考・表現できるのだ，思考・表現する意味を感じさせたいと無意識に考えていることに気づいた。そして，この気づきから，私が言語文化教育の教室では大切にしたいのは学習者が思考・表現している瞬間を実感・意識することだと考えられるようになった。思考・表現を実感・意識しているからこそ，発したことばを自分のことばとして捉えることができるのではないかと考えている。このような一連の思考とそれを表現化したことばで私の小さい理念が具体的な形で誕生した。そして，なぜ私にとって思考と表現が大事なのかという問いも自然に答えられた。私は最初に「言語文化教育の教室で，5 年間日本留学生活の中で私は初めて自分のことばで語ることを実感した。」と書いたが，今は，それ以来，私は自分のことばで語っていることを毎日実感しているに言い換えたい。

次に，私が最初に考えた「言語文化教育観」の中心となる個の文化について述べたい。個の文化とは何かを定義するのは私を悩ませた。私は昔からそれは人の考え方・価値観なのではないかと考えたが，なんだか単純すぎて物足りない気がずっとした。しかし，BBS の W さんの個人主義の定義の書き込みと，細川先生の講義のことばに触発され，個の文化とは価値観をはじめ，性格，趣味などによって構成される人間の中身であり，それは人間の生きているうちに背負ってきた様々な社会とのかかわりの積み重ねともいえるという定義づけをすることができた。この定義は最初の「言語文化教育観」で書いた「私は個の文化はオリジナリティーだ」ということと呼応しているといえる。オリジナリティーとは独創的であって，世界中これ以外同じものはないということであろう。人間と人間の間に共通点を見つけることができるが，まったく一致することはありえない。たとえ双子だとしても同じ中身であることもないと言い切れる。そこで，私は議論を通して得た個の文化の定義は，

最初考えたオリジナリティーに呼応して，より具体的なことばでオリジナリティーの解説になっているともいえる。

また，私はGBKを受けた最初から個の文化の形成に対する考えはほとんど変わったことがない。それについて最初に書いた文章は次のように示されている。

> オリジナリティーを出すために，私は一人で考え込み，書き込んだ作業に励んだが，そのただの考えの原石を，オリジナリティーの宝石に磨かせてくれたのは，クラスメートのそれぞれの文化とぶつかったからである。そこで，オリジナリティーなり，個の文化なり，それを一人での完結作業で形成されるものではなく，他者の文化に触れながら，永遠に変容していくものだと捉えている。

この文章とBBSで価値観についての書き込みと呼応している。

> 思考と表現の往還を繰り返すことによって，価値観を再構築していくと思います。ただ，これは一人の完結作業ではなく，他人の価値観とぶつかりながら，何かを取り入れたり，何かを削ったりするのです。

この三ヶ月の議論を振り返ってみたら，私は議論の中で常に一人の作業ではなく，他者との関わりは大事だという主張を繰り返していたことに気づいた。それは価値観の再構築であったり，個の文化の形成であったり，合意形成であったりした。もう一回読み返すことによって，私はずっと同じことを書いていたなあと発覚した。単純だが，それはやはり自分が一番主張したいことなのではないかと思えるようになった。個の文化の形成にはもちろん思考と表現の往還が必要としているが，その往還という循環を絶えず運行させるのは，他者との関わりであったり，他者の価値観とぶつかりであったり，他者との合意形成である。簡単にいうと，個の文化の形成は他者の個の文化と擦り合わせることだ。

ところで，私の考えが一つ変わったことがある。私は最初の「言語文化教育観」では「私の考えている個の文化は，他人の文化に触れる際に随時に変化するものでもある。」と書いた。つまり，合意形成する際に，自分の個の文化にあるイメージ・認識をすぐ変えなければならないと思った。しかし，今は合意形成の意味は常に自分の認識・イメージを疑い続け，更新しようと思う意識を持つことにあると思うようになった。それは個の文化で形成されている認識・イメージはただ一つのステレオタイプであって，人間はそれらのステレオタイプを持ち，生きていくことがわかったためである。そこで，自分の認識・イメージであるステレオタイプを強制的

に変えることというより，それが固定化，化石化しないように常に更新しようという意識を持たせることは何よりも大事だといえる。

私は最初考えた「私にとっての言語文化教育観とは」は次のようなことを書いている。

> 私にとって言語文化教育とは人間に言語と文化を国の範疇から捉える形式から解放させて，自分の操る言語に自分の魂を注ぎ，様々な人々に出会う際にちゃんとその人の中に内在している文化を直視し，それに触れながら自分なりの文化を作り上げていく能力を育成する教育だと思う。

今の私にとっての言語文化教育とはあまり変わらなかったが，自分の操る言語に自分の魂を注ぐというのは，自分が思考・表現できる，思考・表現している瞬間を実感・意識しているからこそ，ことばに自分の魂が入っているといえる。そして，「様々な人々に出会う際にちゃんとその人の中に内在している文化を直視し，それに触れながら自分なりの文化を作り上げていく能力を育成する教育」を他者の個の文化と擦り合わせながら，自分の個の文化を作り上げていく能力を育成する教育に言い換えられる。さらに，個の文化の形成のプロセスにおいてステレオタイプを更新しようとする意識は一番問われていることだと付け加えたい。最後に BBS の書き込みを引用して，私の結論の終止符として打ちたい。

> たとえ，最後の最後で価値観が変わらなかったとしても，価値観のぶつかり(刺激)，思考，表現といったプロセスを経ていれば，その価値観は再生成されたものだと言えます。つまり，価値観の外見が最初と同じように見えても，実は中身が変わったというような感じです。

このように三ヶ月の GBK の授業と他者と関わりを通して，私の個の文化の一部である，言語文化教育観が確認・更新されながら，目に見える形で確立されてきたのである。

4. おわりに

GBK の三ヶ月は私にとってハードな戦いであった。しかし，予想通りに GBK の教室で私とクラスメートがそれぞれの文化を日本語を通して出し合ったことで，お互いに分かり合う喜びを十分味わい，それが私にとってことばを学ぶ意味なので，ハードでありながら満足している。同じ内容の講義を聞いていても，一つの議論に

めぐっても，クラスメートのそれぞれの発言を聞くと，皆の解釈がそれぞれであって，まさに十人十色だった。一つ一つの発言から，この人はこのようなことに関心があるのだ，その人はそういう捉え方で物事を見ているのだ，などなどの発見がたくさん見つけることができる。なので，三ヶ月の議論を積み重ねていくうちに，クラスメートの一人一人に対する認識はただ研究室の所属と名前だけでなく，今までの発言に基づくその人なりの色も付随してくるのである。細川先生をはじめ，クラスメートまで，GBK でのあらゆる議論を通して皆のことを深層まで知ることは私の一番大きい収穫である。このように人と人の関係がより深く結ばれていくことは私が言語文化教育に一番魅了されるところなのである。

言語文化教育の理念を究極すれば，人と人，国と国の紛争をなくし，世界を愛と平和が満ちるところにすることができることを信じ，世界平和を迎える日が来ることを心から祈っている。

このような希望を持たせてくれた細川先生，そしてクラスメートの皆様に感謝を申し上げる。